

野上彌生子 「母親は何故に子供を愛するか」をめぐるつて

—『野上彌生子全集』未収録資料の紹介を兼ねて—

MATSUKIYO TOSUAKIYO
松本 常彦

はじめに

野上彌生子に「母親は何故に子供を愛するか」という文章がある。掲載誌は「九州国際文化協会会報」第一号（以下、会報と略記）で奥付は次のごとく。なお、会報その他のからの引用は、人名の旧字体は原文に従い、それ以外は新字体に改める。仮名遣い、おどり字などは原文通りとする。

昭和十五年九月十五日印刷、昭和十五年九月二十日発行、
（非売品）、編輯兼発行人（九州帝国大学附属図書館内九州国際文化協会）東郷萬七、印刷者（福岡市渡邊通四丁目）間藤次郎、印刷所（福岡市渡邊通四丁目）秀巧社印刷所

「母親は何故に子供を愛するか」は、昭和十三年十月から翌十四年十一月までの欧米訪問を踏まえ、文化の比較や展開という問題を背景に、文字通り「母親は何故に子供を愛するか」という一見自明の問題を、自明ならざる問いとして再考しようとする内容になっている。彌生子の創作活動における欧米体験の

意義については、先行の評伝や作家研究などでしばしば指摘されることであり、母親と子供の問題が、作家彌生子にとつて、もつとも大きなモチーフであり、長い作家活動を貫く大きなテーマであったことは言うまでもない。欧米体験という点からも、母親と子供の問題という点からも、彌生子の文学の総体を考える上で、注目に値する文章かと思う。あるいは、たんに活字化された彌生子の講演という点でも貴重であろう。

「母親は何故に子供を愛するか」は、元来はその場かぎりの講演のための原稿として用意されたものである。およその内容は先に記した通りであるが、講演の活字化という性格上、それは、それを掲載する会報およびその発行元である九州国際文化協会（以下、協会と略記）という組織の性格とも深く関係している。したがって、本文を紹介する前に、まずは、会報と協会について述べておくのが便宜であろう。

「九州国際文化協会会報」第一号について

会報の巻頭には上質紙に印刷された三枚（六頁分）の写真があり、それぞれ「創立祝賀の晩餐会」、「パレスチナ橄欖山（新興アジア文化写真展覧会出品の中）」、「南洋ヤツプ島女子青年団員の憩ひ（新興アジア文化写真展覧会出品の中）」という説明が付されている。「創立祝賀の晩餐会」は、昭和十四年九月十六日の協会の発会式後の晩餐会であろう。新興アジア文化写真展覧会については、後述の事業報告の項で言及する。

次に目次があるが、タイトルなどが本文と異なる場合もある
ので、ここでは本文に従って概要を示す。

「九州国際文化協会発会式式辞」九州国際文化協会会長

荒川文六

「九州国際文化協会の創立にあたりて」(一)

「九州国際文化協会々々則」(二)

「本協会創立経過報告」(五)

「九州国際文化協会昭和十四年度事業報告」(一〇)

「新興アジア文化写真展覧会経過報告」(一四)

「九州国際文化協会図書蒐集に関する報告」(一六)

「九州国際文化協会昭和十四年度収支計算」(二〇)

「会員氏名(五十音順、昭和十五年六月一日現在)」(二二)

「北支蒙疆の今昔」竹岡勝也(一)

「蒙疆地方の地理と史蹟」重松俊章(二三)

「雲崗瞥見」矢崎美盛(三七)

「母親は何故に子供を愛するか」野上彌生子(七六)

「編輯後記(七月下旬T)」

奥付

丸括弧の漢数字は資料本体の頁付けである。すなわち、荒川
文六の式辞には頁付けはなく、「九州国際文化協会の創立にあ
たりて」の最初の頁に一という数字が記されている。「会員氏
名」は二二頁から二六頁までで、その次に青緑色の薄葉の間紙
があり、「北支蒙疆の今昔」の本文の頁付けは、再び一となっ
ている。頁付けからは会報は二部構成で、内容的には第二部が

講演編になる。彌生子の文章は、その七六頁から巻末の九〇頁
にわたる。講演編のほかの講演・執筆者は、いずれも九州帝国
大学法文学部の教授であり、専攻は、竹岡勝也が美学、重松俊
章が東洋史、矢崎美盛が哲学である。

九州国際文化協会について

次に、会報から摘記するかたちで協会の概要を見よう。

協会の成立に際し、強調されるのは、福岡の地勢上の利点で
ある。「九州国際文化協会の創立にあたりて」は、福岡は「往
古対外交渉の要衝」であり、「東亜航空路の中心」で「門司、
長崎の国際港を両翼に擁し」、さらに「唐津、雲仙等の国際的
観光地を近隣に控へ」、「国際文化事業を遂行する」に「絶好の
地の利を占める」とする。にもかかわらず、福岡には国際文化
機関がなく、その設置が望まれていたと協会設立の背景が説
かれ、「本協会創立経過報告」は、「東京や京都に日独文化協会、
日伊学会、日仏会館などいふ国際的文化機関があるに拘はらず、
我が福岡にかゝる機関が無かつたことは、甚だ物足りなく感ぜ
られるところであつて、その設置は我れ等多年の宿望であつた」
と述べている。その「宿望」の達成には、多分に偶発的な事情
も与つていた。同報告は、「外務省文化事業部第二課長市川書
記官」が、「フィンランド駐在中、九州帝国大学の附属病院が
その宿痾に対して特殊の治療法を発見した旨の新聞記事を見一
て、昭和十四年一月に来福、入院中の「凡ゆる機会を捉へ」、「国

際文化事業の振興」を図り、その「助言と激励」によって「有志の者の間に協議を進め、五月十一日の大学記念日を期して最初の発企人会ともいふべき会合を開く運びとなつた」と記している。さらに、同日の職員懇親会後に「荒川総長を始め、大平（医）、山口（工）、大島、江崎（農）、豊田、小牧、佐久間、三田村、河村（法文）、佐野（図書館長）の諸教授十一名」が、生田喫茶店で協会設立および組織要綱について相談し、その要綱がほぼ会則となつたという。ただし、同事業は「外務省の援助なくしては成果を挙げ難」く、それがなければ一切が無駄になると判断し、「武藤、河村の両名が、右の設立要綱を携へて外務省に市河書記官を訪問し、あらためてその内意を確めた（五月十五日）」とあり、「至急正式に補助の申請をせよ」と言われ、六月六日に会則の制定と役員の配置を決め、「正式に書類を整へて外務省に申請」、「六月二十七日附を以て、本年度五千円の補助金を下附」の通知があつたという。通知の期日が夏季休暇前だったので、発会式は秋として、その間に学内の教授や高等官などに入会を勧め、百二十名の会員を集め、九月十六日が発会式となつた。名義上の事務所は図書館であるが、「平常は便宜上法文学部事務室に於て東郷書記が執務」、「図書類は法文学部演習室の一室に所蔵」とある。

以上が、成立までの経緯であるが、次に昭和十四年度の事業報告についても、要約した上で紹介しておく。

一、発会式（九月十六日・九州帝国大学工学部講堂）

記念講演会・青木節一（国際文化振興会主事）「対外

文化事業に就て」

- 映画・「ムツソリ」の生立、「生花」、「芸術家の一日」
図書展観（九州帝国大学附属図書館）・「外人の日本研究と書」に関する蔵書展観と図書目録の印刷配布
二、フアシスト伊太利大展覽会（九月十九日〜二十九日・福岡市岩田屋百貨店、伊太利大使館・福岡日日新聞社共催）

三、伊太利の夕

- 第一回（九月十九日・福岡日日新聞社講堂）
市河彦太郎（外務書記官）「日伊文化漫談」
摩壽意善郎（日伊学会主事）「最近の伊太利」
アルデマーニ（伊太利大使館情報官）の挨拶・映画
第二回（九月二十三日・福岡市仏教青年会館）
三上孝子 独唱

四、伊太利事情講演会

- 第一回（九月二十日・九大医学部講堂）
アウリチ（伊太利大使）「伊太利の文化」
（アルデマーニ代読・武藤智雄通訳）
大類伸（文学博士）「ローマ進軍を語る」

映画

- 第二回（九月二十六日・福岡日日新聞社講堂）
武藤智雄（九大助教）「伊太利の新教育憲章に就て」
三島通陽（貴族院議員）「若き伊太利」

映画

五、大陸事情講演会(十一月三十日・九大工学部講堂)

竹岡勝也(九大教授)「北支蒙疆の今昔」

重松俊章(九大教授)「蒙疆地方の史蹟に就て」

矢崎美盛(九大教授)「雲岡瞥見(幻燈使用)」

座談会(三畏閣)

六、野上夫妻座談会(十二月二十二日・九大医学部恵愛会館)

七、野上夫妻講演会(十二月二十六日・福岡日日新聞社講堂)

野上豊一郎(文学博士)「動乱の欧洲より帰つて」

野上彌生子「母は何故に子供を愛するか」

八、ドナート博士歓迎会(昭和十五年二月十六日)

九、新興アジア文化写真展覧会(昭和十五年二月二十一日
〜二十五日・福岡市玉屋百貨店七階)

「新興アジア文化写真展覧会経過報告」によれば、昭和十四年十二月の協合理事会で、江崎悌三理事から、九大の教職員が大陸や南洋方面で撮影した写真から文化的意義のあるものを集め展覧会を開いてはという意見があり、三百円の予算がつけられ、その準備事務一切を農学部内にあった科学写真研究会(鳥兎芻会)が引き受け、技術方面は林楨二郎助教が担当し、写真原画(陰画)の募集をしたという。その結果、農学部を中心に、法文学部や理学部からも出品され、数百枚のうちから三百枚を選んで四つ切印画に引き伸ばし、「福岡写壇の権威者川崎

満男氏の批評並に助言を参照」して百八十四枚に絞り、出品者による標題と解説を付して、展覧したところ、他の写真展と比べて「格段に多数の来覧者」があつたという。

協会の事業としては、右のような行事のほか、協会図書館が設置され、外務省文化事業部や国際文化振興会などから寄贈された図書のほか、「太平洋沿岸及東部亜細亞諸国の政治、経済、法律、その他文化に関する貴重な資料の蒐集」が目標とされ、二百二十冊ほどが購入され、その一覽も掲載されている。

講演する母としての彌生子

以上のような協会の発足から一連の活動にいたる経緯の中で、あらためて彌生子の講演を眺めたとき、それが発足したばかりの協会にとって目玉といつてもよい主要な行事だつたことが分かる。それについて「編輯後記」は次のように記している。

野上夫人の講話は今次の欧洲大戰前から宣戦布告後にかけての彼の地を旅行された女史が、母国を離れて母国の姿を顧み、スフィンクス蹲りオーベリスク聳ゆる廢墟のアフリカを背景として母性愛の永遠性を説かれるなど、深い思索から湧き出でた感想の得難い記録である。この講演の要旨は本年一月廿四、五、六の三日に亘り、福岡日日新聞紙上に掲載されてゐるが、本誌に収めたのは夫人の原稿に拠つたものである。

右の後記に見られるように、「講演の要旨」は、「福岡日日新

聞」(昭和十五年一月二十四、二十五、二十六日)の「家庭と趣味」の面に三回にわたって掲載されている。会報と新聞の記事を比較すると「要旨」は同じでも、看過できない違いがある。それについては、具体的に本文を掲げた後で検討しよう。

彌生子は、海外での見聞を旅先からも報じていたが、帰国後も昭和十六年あたりまで、継続的に諸誌紙に発表し、それらをまとめ『欧米の旅(上)』(岩波書店、昭和十七年五月十五日)、『同(下)』(同、昭和十八年六月二十日)として上梓している。それは作家彌生子にとつて、戦時をくぐりぬげるための、ひとつの身がまえでもあつたらう。講演がなされたのは、帰国直後であり、海外見聞記を旺盛に書き継いでいくことになる起点とも言うべき時期であつた。その点でも、「母親は何故に子供を愛するか」は、海外見聞記の集大成である『欧米の旅』に底流する作家の視線をうかがわせる要素に富んでいる。端的に言うなら、欧米体験の紀行文集である『欧米の旅』の底流には、女性の生き方としての母という問題があつたように思われる。それは、戦時における銃後の母という現実とも反響しあう問題であつたはずだが、ここでは、「母親は何故に子供を愛するか」に、その祖形が典型的なかたちで示されていることのみを指摘するにとどめる。そして、その講演には、彌生子自身が、ひとりの母親であることの影が色濃く落ちていたのではあるまいか。講演の内容が「母親」を問題にするというばかりでなく、この講演それ自体が、本来は、母親から子供に向けて語られるはずのものであつたのではあるまいか。講演前後の日記を読むなら、その可

能性は小さくないように思われる。

会報の後記には「本誌に収めたのは夫人の原稿に拠つたもの」と見えるが、協会が野上夫妻を招待し、彌生子が講演のための原稿を用意していたことは、『野上彌生子全集(第二期第七巻)』(岩波書店、一九八七年八月三日)所収の日記からもうかがえる。講演前後の関連記事を適宜抜き出しながら引用しておく。

昭和十四年十二月十七日 日 晴 十四日の午後一時の特

急で東京を立ち十五日の午後0時に白杵に帰つた。

十八日 月 晴 福岡で話す原稿を書いてゐるが中々はかどらない。

二十一日 木 晴 午後の急行で福岡に立つ。十時四十分着、父さんとMと豊田氏夫妻に迎へられて恵愛会館に宿す。

二十二日 金 晴 父さんは講義。Mが十時頃来てくれ、一緒に理学部の彼の部屋に行く。松林の中のしづかな明るい室。ここで落ちついて勉強の出来る彼は仕合せである。

彼の部屋で正子さんに手紙を書く。高野家を訪問したきり一度も便りをしなかつたので私たちの意向を気遣つてゐるとの事である。兎に角手紙を書いてくれと云ふ彼の胸中には十分な愛情があると見なければなるまい。理学部の本講舎を建てる為に、松林を伐ると聞いて驚いた。今は仮のバラックで改築の必要があるにしろ、この美しい松林を強めて伐らなければならないであらうか。(略)Mの部屋の二階が近藤教授の部屋である。一寸御挨拶に行く。朴訥なまじめな学者らしい人。(略)夜は座談会。会談の二階

の集会席。五十人ほどの学生、女学生も少し来る。

二十三日 土 曇、午前小雨 豊田さんと矢崎さんのお家を訪問。矢崎さんは小さい子供連のみ。玄関で少しおしやべりして帰宅すると、矢崎さんが入れ違ひに訪ねて来て少し待たされて来た由。(略) 気忙しく帰ると豊田さんが迎ひに来てゐた。五時から共進亭で九州文化協会の招待の会食。荒川総長や生物学の大島夫妻その他の委員の教授連と福日の主筆や記者。七時から福日の講堂の講演会。三百名。

(略) Mは今夜ニュートン祭が昨夜の集会所にあつて、来なかつた。豊田夫妻送つて来て、講義料と二人分の講演料をおいて行つた。

二十四日 日 晴 博多ホテルで午食。豊田、矢崎、竹岡、四宮の四氏を招待。彼等と豊田矢崎両夫人とMに見送られ、三時すぎの汽車で日豊線に乗る。

十八日の日記に見える「福岡で話す原稿」が、会報の後記に見える「夫人の原稿」であることは、ほぼ間違いない。「父さんとMと豊田氏夫妻」とは、彌生子の夫である豊一郎と夫妻の次男である野上茂吉郎と豊田実夫妻である。東大英文科で芥川龍之介の同窓だった豊田は、豊一郎の後輩に当り、当時は九大法文学部の英文の教授であった。茂吉郎が母親を迎えたのは、彼が九大の理学部の教官だったからである。九大に理学部が創設されたのは、協会の発足と同じ昭和十四年のことであり、東京帝国大学の理学部を出た野上茂吉郎は、理学部物理学科の講師として博多の地で着任一年目を過していた。ちなみに、二十

二日の日記に、松林の中の茂吉郎の研究室を訪れ、校舍建築のために松林が伐られることを惜しむ感想が記されるが、『九州大学七十五年史通史』(九州大学、一九九二年三月三日発行)によれば、創設一年目の理学部は「農学部農芸化学仮教室を譲り受け、また工学部応用理学教室および元地質学教室の一部ならびに元学生診療所等の既設建物を流用し」ており、彌生子の講演から間もない昭和十五年一月に「工学部運動場の西北に木造平屋建ての仮教室三棟の建設が始まつ」ている。

ところで、先に引いた会報の事業報告では、野上夫妻の座談会は十二月二十二日、同講演会つまり彌生子の講演は十二月二十六日になつてゐた。これは日記に照らして明らかのように、実際の講演は、座談会の翌日の二十三日で、それは「福岡日日新聞」の記事からも傍証される。もつとも、彌生子の日記もすべて正しいわけではない。故郷の大分県臼杵から福岡に赴く前日すなわち十二月二十日(水)の日記には、「以下はまた二十六日になつてつける。思ひ違ひもあるかも知れない」と見え、福岡滞在中のことは臼杵の実家に帰つてから記していることが分る。したがつて、福岡やその後を訪問した小倉や別府での記事には若干の「思ひ違ひもあるかも知れない」。たとえば、二十二日の日記には、「近藤教授」と見えるが、当時の物理学教室には「近藤教授」なる人物は存在しない。物理学第一講座の教授武藤俊之助でなければ、第六講座の教授伊藤徳之助であろう。ただし、そうした「思ひ違ひ」はあるにしても、講演の日程については、「思ひ違ひ」が生じる余地はない。

二十三日、二十四日の日記に見える「矢崎さん」は、「雲岡瞥見」の講演者の矢崎美盛である。法文学部の哲学講座の教授で協会の会員でもあるが、野上夫妻にとっては、自分たちの子供と福岡の地を結ぶ恩人でもあった。その事情は、彌生子の「矢崎さんの思ひ出」(「図書」第四十四号、昭和二十八年五月五日発行)という追悼の文章に詳しい。必要な部分を抜き書きすると、豊一郎と同じ法政大学に勤めていた矢崎が、九大に転任する年の春、夫妻の長男の素一は、「一高をすべつて福岡に編入され」る。本人は「福岡なんぞに行くものか」とがんばっているが、夫妻は「一年でも早く大学へ行く方がよい」と説得する。そのときに矢崎が「僕も九州落ちをするのだから、Sちゃん、いつしよに出掛けよう」と言つて、ともに東京を立ち、「福岡でも同じ下宿にいつしよに置いて」くれたのだという。結局、矢崎は素一の熱心な受験勉強強振りを見て、夫妻に東京に帰した方がいいと進言することになるのだが、彌生子にとつて、矢崎の存在と福岡の地とは、素一の記憶と切つても切れない関係にあつたと言えよう。彌生子には「母親は何故に子供を愛するか」とよく似た結構の「日本の母親」という文章がある。掲載誌は「日伊協会会報」第一号(昭和十六年八月三十日発行)で、こうした文章なども、戦時中はイタリヤで研究生生活を送っていた長男素一との深い関係があるのではあるまいか。さらに言えば、会報の昭和十四年度の事業報告に見られるように、協会自体が日伊学会や伊太利大使館との関係が深く、その協会での講演の延長に「日本の母親」が位置すると見ても大過ないように思われる。

それはともかく、彌生子の講演が会報に掲載された背景には、矢崎をはじめ、豊田や茂吉郎など、九大関係者との具体的な関係や交流があつた。豊田は、発足時の協会の理事の一人で、豊一郎との関係からも、彌生子と協会を結ぶ役割を担つたろう。つまり、彌生子の講演が行なわれた昭和十四年は、九大にあって、待望久しかつた協会の発足と理学部の創設が実現した年であつた。講演が、戦時に即した話題を挿みながらも、国際文化を主題とし、口ぶりにアカデミックな傾向を帯びるのは、国際文化の振興を事業の柱とする協会創立の意を汲み、彌生子なりに戦時の国際文化について語ろうと努めた結果と思われる。それが、講演内容の背景となる公的な文脈とすれば、それは別に、講演の内容は私的な背景とも結びついている。二十三日の日記に見られるように、Mこと茂吉郎は、実際には母親の講演を聴かなかつた。しかし、日記の書きぶりからも、彌生子は、物理学者の息子が講演を聴きにくると思つていた。引用した日記に続く十二月二十七日の日記には、「外国旅行中に受けた私の深い絶望感はおそらく死ぬまで癒されないであらう。たゞMやYとともにある時私は一切を忘れることが出来る」とも見える。そのように溺愛する息子であり、しかも、その息子は二十二日の日記から推察されるように結婚問題に直面していた。「正子さん」とは、東大経済学部の初代学部長というより創設者で社会運動家として著名な高野岩三郎の三女で、まもなく福岡の地で茂吉郎と新居を構えることになる高野正子のことである。「死ぬまで癒されないであらう」と語られる「外国旅

行中に受けた私の深い絶望感」を「忘れ」させる結婚を控えた息子が、聴衆の一人になるという条件は、講演の内容や主張とも少なからず呼応しており、そのような呼応を、先には、講演に落ちる母親であることの影と呼び、後には、私的な背景と呼んでみたのだが、いかがであろうか。

ともあれ、その判断の是非を問うためにも、本文を紹介する必要がある。以下が、その本文である。

『野上彌生子全集』未収録資料

母親は何故に子供を愛するか

野上彌生子

今晚の私の話は「母親は何故に子供を愛するか」と言ふ題目になつてをりますので、なにかひどくむづかしい話でもいたすやうにお考へになつてゐらつしやる方もおありかと存じます。が、決してそんな訳ではございません。ほんの一年ほどあるじの力バン持ちをして外国を廻つて参りました赤毛布の土産話に過ぎないのでございますから、どうぞその積りでお聞き頂き度いと存じます。

さてこの度の旅行はあるじには日本文化の紹介といふ任務がございましたが、私はたんなるお伴でございますし、丁度日本もごたごたの最中でございますので、同行の決心を致しますまでは、ついで参らうか、止めに致さうかと可なり思ひ迷つたの

であります。その私を狩り立て、最後の決心を極めさせた理由は種々ございましたが、その中のもつとも重なる一つは日本を外側から眺め度いと言ふ気持ちでございました。支那の古い言葉に芦山に入るものは芦山を見ずと申します。金剛杖をついて富士山をうんうん登つてゐるものに見えるのは、足もとの急な坂路ばかりでございます。もしまた私達が部屋に坐つてゐるとすれば、長火鉢や、茶筆筒や座蒲団が目に入るだけでございませ。自分の家は一体どんな恰好をしてゐるか、隣の家の釣合ひはどんな風になつてゐるかをはつきり知るためには、先づ家を出て外からつくづく眺めなければなりません。それと同じ理由で、私は日本人として日本に生れ、日本に住み、日本の事なら何から何まで知り抜いてゐるつもりで、存外大事などころを見落してゐるのではないかと、言ふことをこの一二年來強く感じてをりましたので、あるじの外国行きをよい機会として急に思ひ立つた次第でございました。歐洲航路の第一の寄港地は御承知の通り上海でございます。閩北一帯の日支事變のあとを見て廻りました時、すでに来てよかつたと私は思ひました。激しい戦のあとの有様は新聞でもよみ、噂にも聞いてゐたものではございますが、正直な印象を申し上げますと、やがて二十年の昔になります関東の大震災の時分に、電車もなければクルマもなく、わづかに荷車で日本橋から銀座界隈を通つて見た時の方がもつとひどい様ではなかつたか、と言ふ気が致しました。これは勿論上海のことがあつてからは既に一年を経過いたしてをり取り片づけも一と先づ出来てゐたからではございますが、それ

に致しましては、そんな事が決してあつてはなりませんし、また決して有り得る事とも信じないのでございませぬが、どこか私達の近くに万が一にも似たやうな事件が発生いたしたならばどうであらう。空っぽになつてもなほ残つてゐる家や、崩れおちても半残つてゐる壁を認めることが出来るであらうか、と考へました時、数日前に後にした日本を私は門に立つてつくづく我家を眺める気持で眺めたのでございませぬ。それから香港、シンガポール、ペナン、コロロンボ、アデンと寄港によつて変はる民族がどう言ふ力でどう支配されてゐるかを見る度にやつぱり思ひ比べられるのは日本の事であり、なにか日本を遠ざければ遠ざかる程日本が後にくつついてゐる感じさへしたのであります。私は政治家でもなければ軍人さんでもございませぬのでさう云ふ事についてたしかなお話を申上げる資格はございませぬ。それ故スエズ運河を経てポートサイド上陸以後のことを申上げたいと存じます。

ポートサイドに上陸いたしましたして、カイロからナイル河の上流まで遡り、古代エジプトの文化のあとを探ることは、私たちの旅行の日程の中でも何よりのしみに致してをりましたので、それを実行した今日から考へて見ましても、まことによい事を致したと存じてをります。と申しますのは、そのエジプトから、ギリシア、イタリー、ヨーロッパ、それから米國と旅行いたしますにつれ、私たちは歐洲の文化のあとを年代的に訪ね、遂に米國の近代文化まで順々に巡礼を致すことが出来たからでございます。

これ等の持つてゐる文化の特徴、また時とともに變つて行く變遷のあとを種々なものについてお話いたしますと幾らか面白いかと存じます。今夜はそんな時間がございませぬので、どこへ参つても一番先に旅人の眼につき易い建築の事に就いて素人考へを申して見たいと存じます。

先づ最初のエジプトに於きましては、クリスト紀元以前數千年に遡ることの出来る神殿がナイル河にそうて所々に見られますが、その最も代表的なルクソールにあるものも、アスワンにあるものも悉く方形を基礎にして居ります。即ち、四角い形で、正面にはバイロンと申してこれも四角な門が立つて、その門にそうて、オベリスク (Obelisk) が立つてゐるのが極まりであります。このオベリスクは後年にこのエジプトに侵入した國々から持去られて失くなつてゐるところが多いのですが、ルクソールの神殿にはまだ二つでしたか三つでしたか見事なものが残つて、ぎらぎらするほど耀いた碧空に聳えてゐました。この神殿とオベリスクを望んだ時には、ピラミツトやスフィンクスを眺めた以上にまことにエジプトだと云ふ感じがいたしました。神殿の内部には如何にも大らかに太々とした、ドリア式のものよりもつと素朴なそれだけ重々しい円柱が立ち並んで、奥の部屋に行くほど暗くなり、一番先きの、いはゆる奥の院とも云ふべき神体のある部屋はまづ暗でございます。それがギリシヤに参りますと同じ円柱でも縦の溝がついて典雅で優美なものになります。神殿の形はアテネのアクロポリスでその代表的なものが見られる通り、また四角な形が保たれてをります。

しかしイタリーに参りますとはじめて円屋根が現はれて参ります。同時に窓もエジプトの神殿では日本の台所にあいてゐる天窓のやうな小さい四角な窓であつたり、高い石の壁の上に武者窓にそつくりの形についてゐたりのが、円い窓になり、柱と柱の間も、エジプトでは直線でないであつたのが、円いアーチ形に變つて参ります。これはセメントの使用が自由になつた為に生じた現象だと建築家は申してをりますが、この円い窓がその後だんだんと尖つて行き、それが一つの宗教的意識と結びついて天に向つて聳え立つゴチックの寺院となつて参ります。私はローマからロンドンに参りまして、ウエストミンスター寺院を見た時、あゝエジプトからとうとうゴチックまで辿りついたとしみじみ思つたのでございますが、この度の歐洲の動亂で一避難民としてポルドウから乗つた鹿島丸が、リヴァプールを経てニューヨークに入港いたしました、あの米國の何十階と言ふ摩天楼を仰いだり、またサン・フランシスコから対岸のパークレーに蜿蜒と伸びてゐる海上八哩の鉄橋を眺めたりいたした時には、私たちの近代科学も終にこれだけのものを拵へたかと新たな感動を覚えたことございました。これらのものを材料の点から観るのも中々おもしろうございました。エジプトにも勿論大理石が使用され、そのもつとも上質なアラバスタで王たちの像や壺などが作られてをりますが、一般には花崗岩が多く用ゐられ、古い王たちのミイラを納めた棺は大抵花崗岩のやうでございます。木造で彩色したものもありますが、これはエジプトと致しましては新しい時代のやうでございます。

神殿は多分石灰岩でございます。黄味をおびた灰いろのわりに柔らかな石で殆んど出来てをります。ところがそれからギリシア、ローマとなりますと、神殿でも、寺院でも悉く大理石でございます。また世界に残されたる最も美しき遺産とも云ふべきその時代の彫像にいたしましたも御承知の通り悉く大理石でございます。殊にローマでは近頃の、日本で申せば貸家ぶしのやうなアパートでも床は無造作に大理石を使つてゐる有様でございます。しかしこれがイギリスとかフランスとかドイツとかになりますと大理石は中々貴重なものになり、有名な帝王たちの宮殿でも床まで大理石と言ふわけには容易に参らないのでございます。さうして米國の近代建築となりましては、鉄と硝子の使用が加はつて材料は豊富になり、またあらゆる科学的な設備で古人たちが夢にも想像することの出来なかつた様式を作り出したのであります。

かうして建築一つを例にとつて見ましても、時代により、また地理や風土によつての變化は驚くべきものであります。しかしこれを人間の世界的變化に比べて見ますとものゝ数ではないやうに思はれます。エジプトの古代の王たちが、いつかもう一度この世に蘇る時のことを考へて、食べるものから着るものまで用意して死んだ墓は、今日では一種の遊覽所となつて旅人たちの無遠慮な侵入に任され、彼等のミイラは博物館に並んでゐる有様でございます。またこのエジプトにおきましては、私達はアレキサンダー大帝や、シーザーや、ナポレオンの名前を到るところで耳にいたします。古來のもつとも偉大な征服者の

トリオとも言ふべき彼らの足跡を私はナイルの河畔の多くの神殿に見出すことが出来ます。何故なれば大軍を率ゐて侵入する場合、神殿はもつとも便利な兵舎の役をつとめたからでございませう。その近くにはローマ軍の墓地が残つてをり、また糧食庫のあとも見られます。また或る神殿の世にも美しい浮彫に飾られた壁に、なにかを通したやうな穴がハンドルのやうにずらりと並んでゐると思ふと、案内人が、これはナポレオンが侵入してこれを兵舎にした時に、兵隊たちが馬をつないだのだと説明いたします。スフィンクスの鼻が彼等の大砲で吹き飛ばされたことは皆様も御承知の通りでございませう。しかしこれ等はすでに遠い昔話であり、過ぎ去つた歴史であります。アレキサンダーは彼の作つた町なるアレキサンドリアにわづかにその名をとゞめてゐるに過ぎず、シーザーはローマの廢墟の一隅に、丁度お正月のお供のやうな形をした円い石に蔽はれて眠つてをり、ナポレオンの華々しい生涯もほんの二三ページの歴史となつてゐるだけでございませう。そんな事を考へながら彼等の旧跡を探ねて歩いてをりますと、人間の歴史の推移がまざまざと眼にうつるかんじで、人の世、人の仕事と云ふものがなんと果敢なく定めぬものかか一種の無常を感じるのでありますが、その後からいゝやさうばかりではない、むしろかうした変化のあひだにあつて決して変らないものがあると思ふのはかうした場所でも母親と子供の姿を見る時であります。どんな土地でも人間の住むところならば母親があり、子供があることは申すまでもないことでございますが、アラビア人の小さい泥の小屋にも若い母親

が小さい子供を抱いてニコニコしてをります。エジプトの女たちが、あの頭から冠つてゐる黒いヴェールの下に、なにか大事さうに隠してゐると思つて氣をつけて見ますと、赤ん坊を入れてゐるのでございませう。またこんな婦人たちがその貴重な荷物を抱いて驢馬で沙漠の路を歩いてゐるのに出逢ひますと、あの聖書の中のマリアがキリストを抱いて驢馬で遁げて行く時の姿はきつとこんな様子であつたらうと考へたりいたします。すると見知らぬその女のひとがマリアのやうな幼いクリストのやうな親しみを感じさせます。こんな辺鄙な土地でなくともロンドンでもパリでも、ベルリンでも公園などで小さい子供をつれてゐる婦人たちを見ますと、私はなにか以前から知り合つてゐる懇意な人のやうな氣がいたします。これは勿論私が女であり、母親であり、子供をもつてゐる為でございませうが、こんな時に私は折々妙なことを考へます。それは何故母親は子供を愛するののか、と云ふことでございませう。ほんとうにこれは何故でございませう。何故母親は子供をこれ程に愛するのでございませう。こんなことを殊更に申しますと、何を下らないことを云ふのだ。父親にしろ母親にしろ人の親として子供を愛しないものがあるか。問題にするのも馬鹿げてゐる位分かりきつた事だ。皆様はかう仰しやるに違ひありません。まことにお言葉の通りですが、人間は分かりきつた事にも時々何故？と言ふ疑問をおいて見ませんと本當の意味を探り出さないものだと存じます。林檎が樹から落ちた。これはアダム以来の人間が毎年目にした事実と思ひますが、何故落ちたのかと林檎の樹の下で腕組みをした人は

ニユートン以前にはなかつた。みんな当り前の事として片づけ
て仕舞つたのでございます。それ故私は林檎が樹からおちる以
上に自然な分かりきつた事実を、皆様と今夜御一緒に考へて見
度いと思ふのでございます。

ものは反対の場合から考へて参りますと、わりに簡単に分か
ることがございます。もし母親が子供を愛さなかつたらどうで
ございませう。もつと根本に遡つてもし子供を持たなかつたら
どうでございませう。今度は少し角度を変へて見て結婚する若
い人たちが悉く子供を持たうとして結婚したのでせうか。こ
ゝまでくると些か妙な表現になつて参りますが、近代のヨーロ
ッパ的な考へ方では結婚も一つの軀となつてをります。しかし
どう通げ廻つて見たところで終にそこに追ひこまれて行く。プロ
セスはバーナード・ショウが彼の傑作なる『人と超人』の中に
美事に描いてゐるので皆様も屹度御存じのことゝ信じますが、
あの中の主人公のジョン・ターナーや女主人公のアンのやうに
経済的に生活を保証されてゐる人々はそれで済むと致しまして
も、彼らとは比較にならない貧しいものに対しても恋愛は常に
美しい夢として現はれ、それが結婚にまで進行するの常の順
序であります。この場合には子供と結婚は別の問題になり勝
てでございます。然るに子供を得た時の彼ら――私は複数でお話
をいたし度いのはありますが、私はこゝでは母親を主として、
それに力点をおいて考へ度いのでございますから、男子の方に
は少々お気の毒でございますが、わざと単数を使用いたします。
その理由はどんな不幸な結婚によつて生れても、極端な例を申

せば憎みと怒りしか感じないやうな相手であつた子供に対してす
ら、母親の愛情は変らないばかりでなく、その不運がある場合
その愛情を一層深めさへするものだと思つてからでございます。
す。どちらに致しましても母親が若さをも健康をも子供の為
には悦んですりへらし、自分には食べないでも子供には食べさせ、
自分は襤褸を着ても子供には少しでも増しなものを着せ、自分
に教育がなければ子供にだけはどうか人並みの教育を受けさせ
ようとするあの愛情は、いつたい何処からどうして生じたもの
でございませう。これこそ人間世界のよりよい成長と進歩に
対する人類の無意識的な願ひと祈りであると考へることは出来
ないでございませうか。やがてお正月になりますと東京辺には
三河から萬歳がやつて参つて、鼓をボンボン叩きながら今年よ
りは来年と歌ひます。私はあれを大変よい言葉だといつも悦ん
で聞くのですが、丁度それと同じで、自分たちの世代よりはつ
ぎの世代。その世代よりはまた次の世代と常に遅ましい意志を
もつて世界の進歩を助けて行く、人類にとつてこれほど立派な
美しい仕事はないが、この仕事に常に根本的に結びついてゐる
のが母親の愛なのだ、と私はかう信じたいのでございます。バ
ーナード・ショウは『人と超人』の主人公たちを支配してゐる
ものをヴァイタル・フォースと解釈してをりますが、私は世界
の母親達に働いてゐる力に名前を与へる事は出来ません。神を
信ずる人ならば神さまの力とも考へられない事もございますま
い。どちらに致しましても、母親が自分の子供を愛し、それを
自分よりも少しでもよく成長させることが自分の属してゐる国

と社会を成長させ、民族を成長させ、ひいてはそれらの民族の集合である地上の人類を成長させるのだと考へて行く時、母親は子供に対して肉親以上の喜びを感じ得るのではないでせうか。すべての国、すべての民族の母親の愛情がこの覚醒に到達した時にはこの世界にある大きな忌はしい罪悪の大半は姿を消すのではないかと言ふ気がいたします。

こんな言ひ方を致しますと、先づ民族的、国家的国民的の堅い結合が何より必要と考へられてゐる時に、あまり呑気過ぎはしないかと叱られさうな気がいたしますが、私はこれ等の考へ方と国とか民族とか云ふものと背馳するとは決して思はないのでございます。何故ならば、人間が自分の生れた国や民族に対する愛着は運命的なものであり、切つても切れないものであり、一方にどんな広い思想を持たうともそれで生れた土を等閑にしたすものではありません。むしろその生れた国の特徴を根本的に捕へ、花咲かせつゝ一層大きな集合に対して調和あるものとなつて成長いたすことが、もつとも健全な成長ではないかと考へます。

勿論現在の世界の情勢はこんな夢からは非常に遠いものでございます。現に出生に際しましては平和な文化的の仕事を受け持つて出立いたしましたのに、帰りには戦乱の中から避難民として帰る始末でございましたが、この間においても何より大切なことは目前の事件や現象に決して失望しないことであらうと思ひます。如何に思ひの外の事に面しようとも、すべてを一つのプロセスとして勇気を失はず、民族と人類の成長と進歩をど

こまでも信ずることを忘れてはならないと思ひます。私達がナイル河のほとりて出逢つた古代エジプトの王たちが生きてゐた時代から今日までの時代をもう一つ重ねたならば、人間は屹度もつと賢明なましなものになつてゐないでせうか。いかゞでせう。大分夢のやうな話になつて参りましたので、これでお仕舞ひに致しませう。

二つのテキスト・原稿と講演

以上が会報に掲載された「夫人の原稿」（会報後記）であるが、実際の講演は、この通りではなかつた可能性が高い。すでに指摘したように、講演内容は「福岡日日新聞」にも掲載されたが、その要旨と右に紹介した会報の本文には、大きな違いがあるからである。新聞の場合も野上彌生子という署名があり、一見すると彌生子の手による記事に見えるが、「女史の講演要旨である」という断り書きがあるように、両者を比較すると、新聞は会報の本文の間には分量の面で大きな違いがあり、新聞の記事は、当日の講演の速記を要約整理したものであることが判然とする。また、分量の面だけでなく、たとえば新聞での通しのタイトルは「如何にして子供を愛するか」となつていて、会報の「母親は何故に子供を愛するか」とは、すでにタイトルそのものが違つてゐる。ただし、その違いは、是非を決すべきものなどではなく、おそらく彌生子が用意した原稿を実際に読み上げるときに、そのように語つてしまつたことによつて生じた違い

と思われる。彌生子が、原稿を読むようなかたちで講演をしたことは、新聞の談話が、ほぼ原稿に添っていることから察せられる。「外国から日本の姿を見たかった」という小見出しがある第一回（昭和十五年一月二十四日）の冒頭と末尾は、次のような文章になつてゐる。原文のルビは省略した（以下同じ）。

「私のお話は『母親は如何に子供を愛するか』といふ題ですがこれは実は『如何にして子供を愛するか』といふことです。かういふ変な題は何か難しい話のやうに聞えますが決してそうでなくほんの一年ばかり外国を覗いて参りましたのでこれはほんの御土産話です。』（冒頭）

「この人間の住むところにはどういふ場所にも母親がをります。また母親がをるところには子供がをることは申すまでもないことです。』（末尾）

会報の本文と比較すれば、原稿に添うかたちで実際の講演をしたことが推測される。右に引いた第一回末尾の文を見れば、それが会報のどの部分になるか容易に指摘できるはずである。第一回と同じように、「母性愛を判然と見せる各地の変らぬ風景」という小見出しがある第二回の冒頭と末尾も引いておく。

「私が参りました時は十一月でしたが、外は昼は暑くて夕方冷へますが、さういふ時には子供を日向に出すのが心配で自分のヴェールの下に入れて抱いてをります。』（冒頭）

「例へば、林檎が木から落ちる、これはアダム以来毎年目にした事実と相違ないのでございませうが、何故林檎が木から落ちるのだらうかといふことを本當に考へたのは、ニユ

ートンが初めて、ニユートン以前にはなかつたらうと思ひます。』（末尾）

この冒頭と末尾も、それぞれ会報のどの部分と呼応するか、容易に指摘できよう。原稿の文章と口頭での講演という違い、さらに、新聞は講演を要約整理しているという条件も手伝つて、会報の本文と新聞の本文の間に、細かな字句の違いや微妙な表現の違いが多々あるのは、むしろ当然である。あるいは、表現上の違いにとどまらず、話柄の順番や展開が違つてゐる場合などもある。たとえば、右に引いた第二回の末尾に続くのは、会報の場合は、バーナード・シヨウの『人と超人』を引きつつ、親は子供のためには自分は食へなくても子供には食へさせ、自分は襦袢を着ても子供には少しでもないもの着せという話題であるが、新聞では、それらの話題は右に引いたニユートンの林檎に言及する末尾の前で語られてゐる。そうした順番の違いが、実際の講演の直接的な反映なのか、それとも、三回の連載とはいえ、実際には各回ごとに首尾の結構を整え、前後がなくなるとも一回分は一回分として読ませる工夫をしなければならぬ編集の結果なのか、にわかには判断できないが、話題そのものは両者に共通している。したがつて、新聞の第二回までの記事は、ほぼ会報と同じと言っても大過ない。

原稿と講演の違いとして問題になるのは、「マダム・キユーリー夫人の女としての生活態度」という小見出しがある新聞の第三回の記事である。会報の本文には、キユーリー夫人への言及は一切ないし、第三回に呼応するような記事も見当らない。

新聞の第三回が、実際の講演の後半から結びにかけての速記であるとするれば、会報の本文の後半は語られなかったことになる。具体的には、会報の本文にある「やがてお正月になりますと東京辺には三河から萬歳がやつて参つて」云々という一文から後の部分が、キユーリー夫人の話に変更されたことになる。それは、「母親は何故に子供を愛するか」という問いに答える結びの部分であるだけに、この文章および講演全体にとつて、その本質を左右する重要な変更と言つてよい。その意味を検討してもらうためにも、新聞の本文全文を紹介しておくべきだろう。以下が、その本文である（段落の一段下げは原文通り）。

マダム・キユーリー夫人の女としての生活態度

私の在外中に訳されて大変日本でも評判になつてをるマダム・キユーリーの脚本―あの中に私の考へてをることに聯関して面白いことがございます。

マダム・キユーリーの夫のピエル・キユーリーは、御存知の通り立派な学者で常に不幸に苦しめられたといふ悲劇に終つてゐるのですが、このピエル・キユーリーが未だ奥様と結婚をされない前に日記を書いてをります。

多分あの本を読んだ方は御記憶だと思ひますが、それをかひつませんで申しますと、

女といふものは要するに家庭生活といふものが女の生活の全体である、本當に研究的な仕事といふものは理解するこ

とが出来ない女が殆んどである。だから結婚とか恋愛とかいふことは、要するに研究の邪魔になるわけだから、そのことはつまり警戒しなければならぬ。自分の仕事を理解してくれるやうな女の天才といふものは稀だ。

……といふやうに書いてございます。併しこのピエル・キユーリーは、それから数年も経たない中にこのマリー何と申しますか一寸忘れましたが、マダム・キユーリーの前身でございます。ポーランドの一人の女学生に積極的に愛を感じまして彼女に結婚の申込をしたのでございますその時にマリーはいろく前に恋愛上に苦しい経験を致したことがございました。

また非常に勉強といふことに気持が捉はれてゐたのでございますが、それから逃れやうと致しまして、遂に幸せと二人は結婚生活に入ることになりまして、その結婚によつてあのラヂウムの発見といふものは完成したといつても宜しいのでございます。

あの伝記を御読みになつた方はきつと御氣付きと思ひますが、マダム・キユーリーほど仕事に一生精魂を傾けた人は、女の歴史始まつて以来ないのではなからうかと思ふのでございます。

それほどであるのでございますがそのマダム・キユーリーの化学の仕事――一生の仕事にしてゐたその仕事以上に何か愛したものがあるかといへば、それは子供であつたらうと思ひます。彼の女が愛するイレーヌのことを数学の数式の下に書いてをつたといふことや、また夫のピエルからお前はそんなに子供に氣をとられてはいけぬぢやないかと

いふ御叱言が出るほどに、子供を愛してをつたのです。

何時も疲れて精魂を尽して眞蒼な顔をして研究室から帰つて来ても一番に子供はどうしてをつたか、食べ過ぎたりはしなかつたかといふことを心配して、子供の元氣な顔を見ると初めて自分も安心したといふことでございます。

実際の講演は、おそらくキューリー夫人の話でしめくられたのであろう。第三回の記事は、最初から最後までキューリー夫人の話に終始しており、それまでの記事の要約具合から考えて、講演時に原稿にはなかつたキューリー夫人の話にたまたま言及したという扱ひではない。会報と新聞の本文は、話柄は違つても、メッセージ性は同じという関係でもない。会報と新聞と二つの本文の関係についてどう考えるべきであらうか。また、その違いは何を物語るのであらうか。

会報の本文に見られる結論部における主張を変更してまで、キューリー夫人の話にしなければならぬ理由は薄いように思われる。「母親は何故に子供を愛するか」という問いを、自明ならざる本質的な問いとして設定した講演において、会報の方は、「ヴァイタル・フォース」にも比せられる「遅しい意志」という方向で、ひとまず解答を用意している。それに対し、キューリー夫人の例は、夫人が如何に子供を愛していたかという具体例にはなつても、何故という問いには応じていないからである。ただし、キューリー夫人の話の方が、戦時下の講演としては無難であるという要素はあるだろう。キューリー夫人は、

女性であつても立派な仕事を持ち、その仕事を愛していたが、それ以上に子供を愛していたという話は、そのまま銃後の母を奨励する話としても通用する。それに対し、会報の本文には、母親の子供への愛が、「自分の属してゐる国と社会を成長させ、民族を成長させ、ひいてはそれらの民族の集合である地上の人類を成長させる」といった表現が見える一方で、「この世界にある大きな忌はしい罪悪」という戦争批判めいた句も記されている。会報には「夢のやうな話」に托して、現在と違う「もつと賢明なまじなもの」である世界への希求が語られている。そうした希求にも戦争批判の萌芽が認められよう。

会報の本文を捨て、新聞のような無難な講演に変更したとも見られるが、逆の場合もある。つまり、もともと用意していた原稿は、新聞のようなものであり、講演の時点では、くだんの問いに對して、最終的な解答を用意し得ないままだったが、会報への寄稿に際して、あらためて結論部を改正加筆したということもあり得る。文章の成熟度という点からは、後者の可能性の方が高いように思われるが、いかがであらうか。

いずれにしても、原稿と講演の二つのテキストの照応の中で本文の意図やメッセージを読まなければならぬ。その具体的な検討が、「母親は何故に子供を愛するか」の最初の課題となるだろう。そこにも戦時下における彌生子の作家としての身構えとひとりの母親の影が落ちているが、以上で、ひとまず「母親は何故に子供を愛するか」についての報告としたい。